

愛します、寸刻だけ
ハード

淫虐の饗宴

く体験版く

こちらの小説は既刊「愛します、寸刻だけ」の同設定です。よりエロを強めに書き直したのですが、基本は既刊に沿ってありますので、物語の詳しい内容を把握したい方は、既刊の参照をよろしく願っています。(買え)

愛します、寸刻だけ。あらずじ。

上弦の鬼の情報を掴み、ヒノカミ協会から指令がきた炭治郎。

風俗嬢になり、鬼の情報を取得するという任務につかれ、炭治郎はしぶしぶ従う。

山から錆兎が下りて来て、炭治郎の任務のサポートをし、慰める。それに無関心を装う義勇。色情神に憑りつかれた客を調伏したものの、その神は炭治郎に憑りついて

さらに快楽を食ろうと画策する。その変わり、炭治郎の下半身は女に見えるようになり、両方とも得をするため協定を結ぶ。

慣れない素人相手の性交に、炭治郎は精神を少しずつすり減らしながら、任務をこなしてゆくが・・・

突如与えられた熱い口の中の感触に、腰の中心が震えてしまう。両足は広げられて閉じることは叶わず、炭治郎は「客」としている宇髄を拒むこともできないので、髪の毛を掴んで拒否を示すこともできない。

（俺はプロ、俺はプロ・・・！）

炭治郎は自分に言い聞かせるが、身体で感じる快感は人一倍強く、しかも媚薬を流された直後とあつては、我慢などできるはずがない。

宇髄の舌と口の動きは義勇にも負けない程巧みで、またすぐに絶頂が近づいてしまう。

硬くした舌先で鈴口を素早く舐められ、強力な刺激を与えられたと思うと、今度は柔らかくした舌で雛先全体を包み込みようにねつとりと舐め続ける。

炭治郎の絶頂の機会の緩急も分かっているようで、宇髄は炭治郎の腰が快感で跳ねるのを見計らって、口淫を続けている。

（うあ・・・気持ちいい・・・このまま、気持ちよくなっても・・・いいのかな・・・）

お金を払って自分の快楽を求めてきた客から、逆に快楽を与えられるのは少し罪悪感がある。しかしそれは宇髄相手に限ったことで、普通の客なら、受け手よりも責め手の方が体力的に楽なので、何とか責め手に移行するのはいつも炭治郎だった。

（せめて舐め合いたい）

一方的に気持ちよくなるだけの自分が申し訳なくて、炭治郎は宇髄にもしてあげたくなってきた。

「んっ、う、宇髄、さん、俺も・・・したい、です・・・ふぁ、だめっ・・・！」

宇髄がじゅうう、と音を立てて炭治郎の雛先を吸い上げ、腰が引き締まる激悦が続き、あああ、と炭治郎が善がる。宇髄の舌が、その熱さが全て快感に変わって炭治郎に沁み込んでくる感覚には、眩暈がするほどの愉悦が伴っている。

「なんだ、積極的だな。俺は別に構わねえけれど、身長が違うからやりにくいんじゃないの？」

「だ、大丈夫です！そのための修練も積んでいます！」

つい巫子の立場になって言ってしまう後悔したが、その言葉を聞いて宇髄はニヤリと笑った。

「よし分かった！『ご奉仕してくれる』んだろう？したいってなら応えてやらねえとな」

宇髄はあつという間に炭治郎の身体を反転させ、自分が下になり、炭治郎が上になって、さらに身体の上下の位置も変わっていた。

炭治郎の目の前に、想像以上な迫力を持った逞棒がある。淫鬼との戦いで巨大なものを何度も挿入されてきたが、人間相手は宇髄が最大だった。

（落ち着け・・・いつものように、巫子の気持ちで浄化する気持ちで挑むんだ！）

炭治郎は一息深く息を吸い、吐くと、宇髄の逞棒に舌を滑らせた。

（あ、熱くておっきい・・・でも口淫は得意だ・・・！）

口を精一杯大きく開き、炭治郎は宇髄の逞棒を咥え込んだ。しかし、ここで炭治郎は違和感に気づいた。

（あれ？この人・・・）

宇髓の先走り液を嚙下して、炭治郎はその精力が一般人と差がないことを感じ取った。「柱」というほどならば義勇や煉獄のように灼け付くような陽気が感じられるのに、宇髓には全くそれを感じない。だからと言って彼が「柱」だと嘘をついているとも思えない。

（隠遁・・・？）

自分で「忍者」と説明していた宇髓だ。それが本当なら、陽気すらも隠し通せるかもしれない。しかし、人の身体から流れる陽気は皮膚呼吸のようなもので、自分の意思で止められるものではない。それをコントロールできるのであるとすれば、宇髓はとんでもない才能を持った人物ということになる。

（せ、精液を飲み込めば判断がつくかもしれない）

炭治郎は思案し、宇髓の逞棒を口に頬張り、長大な雄は炭治郎の喉までを侵食して、慣れていなければ吐き気を伴うだろう深さまで一気に滑り込んでくる。

「おお、口の中であつたけえ・・・じゃあ、俺も負けないようにしねえとな」

シックスナインの格好で上になった炭治郎の下半身から、反応している雛先を指先でなぞる。

「っ！」

撫でられただけなのに、堪らない快感が込み上げてきて、炭治郎は背筋を一瞬仰け反らせた。しかし、自分の快感に酔っている場合ではない。宇髓を満足させ、その精液を採取して正体を明らかにしなければならぬ。

「んっ・・・む・・・ちゅ・・・んぐ・・・」

口淫をするときの炭治郎のくぐもった声が妖艶だ。この声を聞いただけで、雄なら一回り渾身を大きくする。宇髄の逞棒もビクンと反応し、さらにはつきりと血管を浮き上がらせるのを、炭治郎は口の中で感じた。

（ちゃんと感じてるんだ・・・嬉しいな）

仕事とはいうものの、炭治郎は口淫は嫌いではない。自分の舌技で相手が悦んでくれるのが純粹に嬉しいのだ。もっと好くなつてほしくて、炭治郎は教えられた口淫技の全てを駆使して逞棒を愛撫し続ける。

「うっ・・・こりや、さすが巫子様だな・・・」

感に耐えた宇髄の声が下方からしたかと思うと、炭治郎の秘孔に淫撃が走る。

「うああっ！そ、そこはずるいです！」

雛先を責められながらの秘孔いじりは炭治郎にとって最も気持ちよさを感じる責め方だ。

しかも宇髄の指の動きは慣れていて、秘孔を指で抜き挿ししながら、もう一方の手で雛先を撫で繰り回す。

炭治郎と宇髄の身長差があつて、宇髄の口まで炭治郎の下半身は届かない。なので宇髄は炭治郎の雛先に口淫することはできないが、両手を使って責めることになる。これでは宇髄の方が有利だ。責める部分を全て目視できる上、大きい掌と太い指で縦横無尽に両足の性感帯を愛撫され、炭治郎は気を抜けば自分の快感に浸ってしまいそうになってしまう。

「んぐっ！んっ！んんっ！」

調子をつけて宇髓の長くて太い指が、グチュグチュと秘孔を素早く出挿りし、大人の分厚くて厚い掌で雛先を掴まれ、全体を激しく擦られたかと思うと、炭治郎の濡れた淫蜜を擦り付けてぬるぬるした状態で下腹に雛先を密着させて捏ね回す。種玉もみくちやにされて、会陰も押され、腰から下が蕩ける様だ。

（こ、この人上手だ・・・やっぱりモテるんだろうな、これだけかっこいいんだもんな・・・）
嫉妬ではなく、純粹に感心しながら、炭治郎は身体の快感を忘れようと、宇髓の逞棒に舌を這い回らせ、口で懸命に吸引を繰り返す。その度に逞棒が明らかに反応を示し、炭治郎は反応が嬉しくてますます激しく奉仕してしまう。

「・・・っと、そこまでだ」

吐息混じりで宇髓に言われ、炭治郎は言われた通り愛撫を止める。宇髓が射精するまで続けて、精液から正体を知ろうと思っていたが、お客に止められては仕方がない。

退魔師としては、相手を知るためにここは誤魔化してでも精液の採取を優先すべきだが、生真面目な炭治郎は「客」と「店員」という枠にはめて馬鹿正直に従ってしまう。

炭治郎が唾液の糸を繋ぎながら宇髓の逞棒から口を離すと、宇髓に腰を抱えられ、ぐい、と身体を軽々と引き上げられた。

「うわっ・・・！」

有無を言わさない力に驚きながら、炭治郎は宇髓の鍛え抜かれた腹筋の上に顔を突っ伏した。

「恐れ入った、さすが淫鬼喰らいの巫子さまだ。でもな、俺も結構こういうの上手いのよ」

※中略※

雛先を探られるその下で、男の太い指が秘孔に軽く突き挿れられる。触れられた一瞬は背中を反り返して震えていたが、次第に指の感触に慣れてくると、炭治郎の身体は落ち着きを取り戻し、代わりに一層熱っぽい艶息を吐き始めた。

「なんだ、ケツを弄られるのに慣れてるのか？しょうがねえ猫だな・・・」

「しつぽがピンピンしてるぞ？嬉しい証拠だな・・・」

「うっ・・・んっ・・・!」

雛先を激しく上下に擦られながら、秘孔に挿入された指も、出し挿れが早くなってゆく。秘孔からは淫蜜が零れ、男の指の動きをさらに潤滑にする。

「ほらほらイキそうだ・・・先走りがどぼどぼこぼれてくるぜ？」

「猫の射精なんて初めて見るぜ」

「可愛いなあ・・・」

炭治郎が如何に可愛らしい猫の半獣の姿をしていたとしても、普通の人間がここまで欲情を開放したりはしない。

全ては、炭治郎の幻術にかかり、理性のタガを外され、誘惑にかかりやすくなっていることが原因だ。あとの二人の炭治郎を欲望の対象に見ている男たちも、もれなく幻術にかかり、それぞれの性欲を増長させ、目の前の現れた好みの炭治郎を凌辱の対象として弄んでいる。

「ひあつ・・・！ふにやあああつ！」

難先を抜く男の手が早さを増し、炭治郎の背中が反り返ると、その先端から白液を放った。

「今度はこっちだな」

炭治郎の秘孔を指で探っていた男が、指の数を増やしてさらに深く中に侵入する。

「んぐう、ふああ・・・！」

「おら、猫はここも気持ちいいんだろう？」

一人が炭治郎の尻尾の根元をトントンと叩き始めた。

「んああああつ！」

叩かれ続けながら、尻尾がピンと縦に伸びる。尾てい骨から感じる振動の快感と、胎内の指の感覚に翻弄され、猫炭治郎は暴れる手足も拘束され、されるがままに快楽を注がれてゆく。

「あつちはまだあがつてるな。ほらほら、お前も早く出せよ」

「くっ・・・もう、そう簡単に・・・！」

ベビードールを着た炭治郎は、両足を震わせながらも男の掌の感覚に耐えていた。二度目の射精を促され、なんとか快楽に抗おうとするが、身体はすぐに流された。

「尻が丸出したな・・・ケツの穴が見えるぜ？」

「ひやっ！見ないでっ！ああっ！」

男の指が秘孔に挿り込み、炭治郎の身体がくの字に曲がる。秘孔はすでに淫蜜で潤い、男の指を難なく受け入れた。

「なんだよ、もうやる気満々じゃねえか……恥ずかしがってる割に、こういうのが好きなんだろ？」

「ち、違う……あつ、あああ、あつ……！」

秘孔の中で指を素早く上下に動かされ、頭の芯が痺れるような快感に、炭治郎は艶声を上げる。

「こつちも硬くなってきたぜ？」

三角ブラの下にある胸の桜色に指を掛け、上下に素早く擦り、男は炭治郎の性感を高めてゆく。

「あああつ……こ、こんなあ……」

最も感じる性感帯を同時に三か所責められ、炭治郎の身体は一気に燃え上がる。一度吐き出した熱だったが、もうすでに次の興奮が押し寄せ、すぐにでも押し出されそうだった。

「ひゃあつ！やめて下さい、なんで舐めるんですか！」

幼い姿の炭治郎をあやしなから、むき出しになった上半身の桜色の桜色に、男が口をつけて舌で転がしている。

「ほらほら、これをするとう気持ちよくなるんだよ……ぞくってしないか？」

「んんっ……ああ、へ、変な気持ち……ぞくって……します……」

可愛らしいだけだった容貌に、官能的な雰囲気加わって、好事家垂涎の艶めいた少年に変えられてゆく。上半身に注意を向けていた炭治郎は、下半身の布にかかる男の手に気づかず、一気に下の布も取り払われた。

「うわあつ！何をするんだ！」

裸を隠そうとする炭治郎の両手を掴んで頭上に括り上げ、男が厭らしく笑う。

「綺麗な裸じゃねえか・・・隠すなんて、もったいないぜ？」

「あつ・・・うう・・・」

「それに、気持ちよくなるのは胸だけじゃないぜ？男はここが一番気持ちいいんだ、知ってるだろう？」

「あつ、やめて！触るな！そんなところ・・・！」

男は炭治郎の幼い雛先を握り、ゆるく上下に擦り始めた。最初は反抗的に動いていた炭治郎だったが、すぐに上半身の快楽と相まって、身体が熱に包まれて快感に流されてゆく。

「すべすべの肌だな・・・オジサンはうらやましいよ・・・」

「んんっ・・・さ、触らないで・・・ヘン・・・です・・・身体が熱くて・・・」

戸惑う炭治郎の反応がいじらしくて可愛い。その言葉と吐息が、ますます男たちを増長させ、若い身体を暴きにかかる。

「ひゃあああつ！そこお尻の穴！汚いです！」

指で秘孔を探られ、炭治郎が悲鳴に近い声を上げた。しかし、男の指はその声が聞こえないかのように動き、指の先端を洞内に潜らせる。

「うあつ・・・ああ、ああつ・・・な、何を、挿れたんですかつ・・・」

「ふふ、指だよ・・・嫌がつてるくせに、ここは濡れてるね・・・いけない子だ、こういうことを知ってるのかな？」

「うう・・・し、知りません・・・！」

強がる声も弱々しくなり、炭治郎の身体は完全に淫熱に覆われた。

三人の炭治郎が感じているすべての快樂が、本体である一人の炭治郎に向かい、身体に快感を蓄積させ、集中の邪魔をする。

三本の指が秘孔を探り、両胸を指や唇で弄ばれる感覚、雛先で射精させられた快感と射精に至る快感、それら全てを一身に受け、炭治郎は耐える。

「うっ・・・くっ・・・！」

肩幅に開いた両足がガクガクと揺れそう。背中にゾクゾクと総毛立つ感覚が走破し、快樂を感じる中枢神経を刺激する。欲望を募らせた汚らしい男たちの手管を全身で感じることに嫌悪感があつたが、それも最初のうちだけだ。今は快樂に流されないよう、必死で堪えている。

額から汗が流れ、顎にまで伝い、地面に落ちる。それすらも気づかない集中力で、炭治郎は男たちを幻惑すべく、術を発動し続けた。

男たちの指や舌の感触が体中を這い回り、両足の指に力が入る。独り耐える炭治郎の眼前で、男たちは分身に対してそれぞれ興奮を高めていった。

「男なのにケツが濡れてるぜ・・・いや、男っていうか、獣人だな。猫は汁が垂れるのか？」

猫の炭治郎の秘孔に指を突き挿れていた男が、入り口をかき回すと、とろりとした淫蜜が滴り落ちる。その滑らかさが指の動きをさらに活発にさせ、中を挟り、炭治郎の性感帯を見つけ出す。

「んんっ！にやつ・・・ああ・・・っ！」

急に声が艶やかになった炭治郎に眼を細め、男たちは盛り上がった。

「ははっ、ケツのここがいいのか？ほら、イッていいぜ？イケ、イケ・・・」

指を内側に曲げ、中の性感帯に程よく食い込むようにして上下に擦ると、炭治郎は尻尾をピンと突き立て、臀部を持ち上げて快感に身体を戦慄かせる。

「あっ・・・うううっ！はあ、はあ、あああああっ！」

猫耳を伏せ、炭治郎が胎の快感に酔っていると、反応している雛先に別の男が手をかけ、上下に擦り始めた。

前後挟み撃ちの快感責めを受けて、炭治郎がさらに身体を硬直させ、強く震える。

「んあ、ああ、あ、あ、あああっ！あっ！あっ！あっ！あっ！」

「はは・・・可愛いねえ、そのトロロンとした顔と猫耳がほんとうによく似合ってるよ、猫ちゃん」

そう笑うと、男は胎内の責めをさらに激しくした。淫蜜と汗の混じった液体の音が、じゅぶじゅぶと響き、不意に胎がきゅうう、と締る。

「にやつ・・・あ、あ、あ、あああっ！」

切羽詰まった声を上げ、炭治郎が背中を大きくのけ反らせた。

「おっ、イクか？ほら、イケよ、イケイケ！」

調子に乗った男が中の性感帯をぐり、と挟った瞬間、さらに体内の締め付けが強くなり、男は指を動かせないほどになった。そしてその直後、炭治郎の身体はブルブルと震え、雛先から白液を放ち、がくんと身体を弛緩させた。

（ううっ・・・達悦の快感が流れ込んでくる・・・）

猫の姿の炭治郎が前後で絶頂した瞬間、本体の炭治郎にもその感覚が流れ込んでくる。体内で爆ぜる快感に、両足がガクガクと震えてしまう。

「こんなベビードール着て、変態だと思ってたら本当に変態だったとはな・・・ケツが濡れてきてるぜこいつ」

「ううっ・・・」

赤面して恥ずかしそうに身をよじる炭治郎だったが、秘孔に挿入された指の動きに抗えず、快感のうめきを漏らしてしまう。

「これだけぬるぬるしてるなら、即挿れしても大丈夫だろう」

「ふあっ・・・や、やめ・・・ああっあああ！」

秘孔をまさぐる男の指の挿入が激しくなり、炭治郎は背中を反り返して淫らな反応を示す。

一方、今よりも若い風貌の炭治郎は大の男たちに体中を厭らしい手で這いずり回されていた。

「あ、あ、ああっ・・・ひあっ！」

綺麗な胸の桜色を摘ままれ、炭治郎の身体がびくつと跳ね上がる。その反応に気をよくしたのか、男の指使いがさらに巧みに動いた。

「うああ、そこ、変、変です、他も、どこも、なんだか変・・・あああ、触らないで・・・あああ！お尻の穴がっ・・・！」

「これは変、じゃなくて気持ちいいんだよ？ほらほら、ケツが濡れてきたね？まるで女の子みたいだ。男の子は、こんなところ濡れないぞ？それとも、君は女の子なのかな？」

※中略※

『みてみてー？この子、欲情すると愛液を出すのよ？男なのに、尻から！出すのよ！ほんととはしたないと思わなーい？』

炭治郎の濡れる様を見た男たちがどよめき、モニターには濡れている様と顔が同時に映し出される。

「あっう・・・あうっ・・・あ・・・ああっ・・・！や、やめ・・・やめ・・・」

指でコツコツと好いところを突かれ、とろけるような快感が止まらない。大勢に自分の醜態を見せているという事実は理解しているが、それよりも快楽が先に立ち、炭治郎は徐々に意識が混濁しかけ、淫欲が抑えられなくなりつつある。

「気持ち良さそうね。一回イッとか？そしたらカプセルがもつとたくさん潰れるわよ？」

プラムの囁きでカプセルのことを思い出し、炭治郎は多少の正気を取り戻した。

「うっ・・・あ、い、いい、しなくて、いい・・・！」

「大丈夫よ？私は上手だから。淫乱一人をイカせるなんて朝飯前よ」

プラムはグローブをしていない素手で炭治郎の肌を撫で上げる。それだけで妖しく甘い感覚が一気にせり上がり、炭治郎は堪え切れず熱い息を吐き出し、身体を小さく痙攣させた。

下腹から左胸を何度も往復して撫でられ、最後に左の桜色の桜色を指先で抓まれる。

「んぐうっ・・・！」

ズン、と甘い快感が落とされ、すぐに絶頂間際まで昇りつめさせられて、炭治郎は焦りを感じた。

(こ、ここまで陰気が回っているのか？これ以上刺激を受けたら、意識が・・・)

すると、不意に左胸を打撃され、炭治郎の肌は引き攣った。

「いっ・・・!!」

痛いはずなのにその奥に妖しい感覚があり、ジンジンとした痛みの痕跡から熱が生じて、炭治郎は顔を上気させる。

「ふん、癢に障る肌！あとで鞭打ちにして、ズタズタにしてやるわ」

一転してプラムが怒りの表情で凄み、炭治郎に鬼の視線を向ける。それに抗するほどの眼力は今の炭治郎では引き出すことができず、ただ妄と打たれた胸を眺めるしかできなかった。

(悔しい・・・抗いたいけれど、動く薬の巡りが速くなる・・・！)

薬の効果が発揮されて来たのか、徐々に炭治郎の身体は熱を帯び、さらに薫る汗を滴らせて肌をほんのり赤らめている。性感神経もすでに針の先のように尖って、どんなわずかな刺激も快楽に変換されてしまう。体中の快感を覚える部位が次々と騒めき立ち、達することができ性感帯は暴れ出したいほどに疼き始め、いよいよ忍耐が試されるようになってしまった。

(んんっ・・・これはきつい・・・耐えないと、身体を、制御・・・しないと・・・)

無惨の陰気を含んだ薬は炭治郎と抜群に相性が悪く、意思に反してどんどん身体が淫欲を深くしてしま

う。

炭治郎の赫い瞳は潤みを持ち、顔も肌も桃色に染まり、快楽の疼きに耐えようと氣丈に吊り上げた眉が、余計に見る者の欲情を煽る。

「かわいいねえ、かわいいねえ・・・」

「今日は何人がかりでこの子を犯すのかな？」

「私たちも参加できるのでしようかね？」

「別途サービスで抱けるなら、百万までだしますよ」

「本当に淫鬼喰らいの巫子だとしたら、葦屋のマンションを買ってあげてもいいなあ」

「困う気ですか？」

舞台の上の炭治郎が欲情を深める姿を見て、男たちはいよいよ興奮しだし、自分勝手な談笑をし続ける。

「ふん、段々気分が出てきたみたいね。カプセルが速く溶けるように、特別に私が可愛がつてあげる」
プラムは炭治郎のツンと尖った右の桜色を、指先を交差させて擦った。

「ふあ・・・ああ、あ、ああ・・・はあ・・・あつ・・・」

ひと撫でされるだけで意識が飛びそうな快感が、擦られることで連続して襲い来て、背筋を伝って脳天まで駆け上がり、炭治郎は妖艶に身悶えた。

「んぐっ・・・！」

最後にビシッと爪先で弾き、炭治郎の身体を跳ね上がらせると、開かれた両足の間に陣取り、淫蜜をベタベタに零している秘孔へと、グローブを嵌めた指を二本挿入する。

「んあぁっ……！あっ！あぁぁ……あ、あぁ……」

指を挿入されただけで下半身が蕩ける愉悦が込み上げ、炭治郎が傾国のため息を吐く。

プラムの指は中を進み、洞内を探る様に動いて炭治郎を感じさせ、淫蜜が止まらず、ぐちゅぐちゅになった洞内を容赦なく責め立てる。

（も、もうだめだ、果てる……果てそう、動くの止めろ……！）

指がある一点に触れた瞬間、炭治郎の身体に快楽の稲妻が走った。

「あぁっ！あっ！あぁぁぁぁっ！」

「なるほど、ここね？ここが気持ちいいのね？たっぷり可愛がつてあげる」

洞内の前立腺の裏、最も感じる性感帯の一つを捕まえられ、指で押されるだけで一気に絶頂感が込み上げ、炭治郎は背中を仰け反らせ、身体をくの字に折り、激しい快感に翻弄されてしまう。

プラムの指の動きは的確で、容赦なく炭治郎の官能を暴いて来る。

胎内の性感帯に指先が触れた瞬間、稲妻が走ったかのような激烈な快楽を感じ、炭治郎の身体が反射的に大きく痙攣した。

「あっ……あぁ……あっ……」

（い、意識がなくなった、何も考えられなかった……！こ、これが無惨の陰気の効果か？いけない、だめだ……！）

焦る炭治郎とは正反対に、プラムはこの反応を快く思ったらしく、執拗に性感帯を指先で責め始めた。

「あぁっ！あ！あぁぁぁ……っ、は、あ、あぁぁぁぁぁっ！」

「もうイったの？ちよつと早すぎるんじゃない？でもまだまだ続けるわよ。あんたの身悶える姿、ほんと面白いわ？」

胎で急激に絶頂感を味わった炭治郎は、自分が達したこともよく理解できず、しかしジンジンと疼く胎特有の絶頂の余韻で、身体の芯が蕩けてゆきそうになる。

プラムが指で性感帯をトントンと叩き、再び絶頂の波がせり上がってくる。一つ叩かれる度に一段ずつ快感が上昇し、炭治郎の口から切なげな吐息が漏れる。

「あ……ああ……はあ、あああ、あつ……あ……！」

声もマイクで拾われ、会場全体に響き渡るが、炭治郎の耳にはもう聞こえてこない。

（カプセルが潰れる……やめて欲しいのに、声が、口を開くと、呼吸しか出ない……！）

あと一回突かれれば果てそうだという具合の瞬間、指が性感帯を強く押しつけると、そのまま円を描くようにグリグリと捏ね回した。

「ふあっ！あっ！ああああっ——！！」

その瞬間頭が真っ白になる絶对的な快楽絶頂が訪れ、炭治郎は羞恥も何も考えられず、ただ身体の反応につられて大きな善がり声を上げるだけしかできなかった。

「まだ二分も経ってないわよ？だらしないわね、さすが淫乱ね」

炭治郎を罵倒しながら、プラムは円運動を止めようとしめない。意識が白む絶頂がその間延々と続き、炭治郎の身体は大きく痙攣を繰り返し、口からはあられもない善がり声が無情にも響き渡る。

「あああああつ！あつ！あああつ……！あつ、ああああ……つ！あつ！あつ！あつ！あああああ——」

スピーカーの音響から炭治郎の艶声が流され、観客たちはそれを聞いて口々に笑い合う。

炭治郎の髪の色が強くなり、赫い目がさらに透明度を帯びて紅くなり、その変容に男たちはどよめいた。

「髪の色と目の色が変わったよ！」

「なんて神秘的なんだ！」

「美しい……！」

「本物の巫子だ！」

「いやあ、しかしかわいらしい善がり声ですね」

「見た目も完璧で声もこんなに可愛らしいなんて、上玉じゃないですか」

「早く輪姦タイムになって欲しいですね」

「神聖な巫子を我々の汚い身体で……くくく……」

男たちの猥雑な話など、快楽の頂点を延々と味わわされている炭治郎には聞こえるはずもない。涎が出そうな官能と身体の痙攣が激しく巻き起こり、相次ぐ絶頂の波に翻弄され、それを止められる術もない。

「ふあつ……ああ、あつ！や、あ、ああ、あ、ああああああつ！」

プラムは三分じつくり炭治郎に絶頂を味わわせると、ようやく指を引き抜いた。

その途端、炭治郎の緊張していた身体がどっと椅子に落ち、息も絶え絶えな吐息が口からせわしく放たれる。

身体は汗に濡れて滴り、秘孔からは淫蜜が溢れ、椅子に水溜まりを作っていた。

清廉を欲望で穢す淫らに濡れ、炭治郎の身体が汗で淫靡に光り輝いている。ほどよく鍛えられた身体に光が当たって、絶妙な陰影が生じている。それは桜の花の影のように儚げでふしだらだった。

「男のくせに情けないわね？じゃあ、今度はこつちを可愛がってあげる。あら、でももう真っ白じゃない」

笑いながら、プラムは炭治郎の雛先を掴んだ。胎内の性感帯で執拗に果てさせられ、雛先は触れられずに何度も射精してしまっていた。

「射精したら、あんたの靈力も一緒に抜けていくから、たくさん出さないかね？」

「んっ・・・んううっ・・・」

ぬるぬるしたグローブで雛先をゆつくりと下から上に擦ると、総毛立つほどの気持ちよさが込み上げ、炭治郎は声を出すことも忘れて息を詰める。

「・・・っ！」

「なあに？我慢？無様にギャンギャン鳴きなさいよ？ほら、ほら！」

激しく上下に摩擦され、一気に快楽の頂点に昇りつめてしまう。雛先から精液が勢いよく放たれて炭治郎のみぞおちまでを濡らす。

「あっ、あああっ！」

射精の瞬間、得も言われぬ快感と同時に、自らの身体に蓄積されている霊力が放出されたのも感じた。
(うっ・・・射精すると霊力が奪われる、我慢しないと・・・)

しかしこれまで触れられず、焦れていた部分を思う存分刺激され、炭治郎はその快感に何も考えられず、腰に甘く走る稲妻のような激悦に息を荒げた。射精してもブラムの扱く手の動きは全く緩められず、達した直後にまた絶頂が湧きあがり、休む暇が一切与えられない。

「うあ、はあ、ああ、あっ！あああっ！・・・あ、ああ、あああ・・・っ、ま、また、出る
っ・・・！も、もうやめてくれっ・・・！」

意思の強い炭治郎であっても、超絶と言っても良い媚薬を含まされた上の連続絶頂には泣き声が出そうだった。

身体がすっかり熱くなり、胎内のカプセルもどんどん溶けて、身体で淫靡な作用を発揮させている。
これまで少しずつ効果を示してきた薬だが、こんな時に限って一気にその効果を発揮してきた。

炭治郎の吐息は速く、激しくなり、皮膚の感覚がおそろしく敏感になって、性感帯の全てが強い刺激を求めて疼き始める。

「あっあああっ・・・！あっ！あああああ・・・！」

胎内でいくつかのカプセルが溶ける感触が伝わってくる。効き目は遅いが、威力を発揮すると恐るべき効果が発露するのだ。

もう炭治郎の身体は、誰の手でも良いから思う存分まさぐってほしい欲求に駆られていた。特に感じる性感帯は切なく疼き、プラムに絶頂を強要される度に他の弄られていない個所が刺激を欲して激しく疼く。

「ううつ・・・！くつ・・・！ああ、あ、ああ・・・あ、ああ、ああああつ・・・！」

本気で感じ入り始めた炭治郎の艶声に、会場の男たちが騒めきつく。

「これは股間に来る声だ・・・可愛らしいねえ」

「穢れを知らなさそうな顔をしていながら、随分男を誘う声をあげるじゃないか」

「ああ、早く犯したい！」

会場の熱気を感じると、プラムは不機嫌そうに眉を寄せて、乱暴に炭治郎を扱い始めた。

「うあつ！あつ！あつあああああつ！ああつ！あつ！あつ！あああああつ！」

「ふん、ぎゃんぎゃん喚き立てるだけのくせに、気に入られたみたいね？低能な男たちにはお似合いだわ！」

「うくつ・・・！うああつ・・・！」

その間も炭治郎は雛先から精液を吐きだし続け、射精の快感と共に霊力も吸い上げられる感覚も同時に味わった。その感覚は性的な絶頂とはまた違う色の快感で、異なる二つの快楽を堪えなければならぬ。炭治郎は普段とは違う愉悦に戸惑いながらも、快感に抗えなかった。

「あああつ・・・！も、もうやめ、止めろ、止めてっ・・・！」

泣き声になって紅く光る眼に涙を浮かべる炭治郎を見て、プラムは淫虐な笑みを浮かべる。

「全くだらしないチンポね！こんなに射精して恥ずかしくないの？しょうがないから、私が教え込んであげるわ」

プラムは箱の中から細長い道具を取り出した。連続射精の激悦で、目の焦点が曖昧になっている炭治郎には分からなかったが、それがどういう使い方をされるのかと知れば、激しく抵抗したに違いない。けばけばしいピンク色をした道具は筒状になっていて、そのまま炭治郎の難先を根元まで包み込んだ。

「んっ……！ううっ……！なんだ、これっ……やめてくれ……っ」

その刺激だけでまた精液を出してしまうほど敏感になった炭治郎が、腰を震わせて快感に悶える。

※中略※

『あっ・・・！や、やめろ・・・！んぐっ・・・！』

グローブを嵌めた指をいきなり三本突き込まれ、胎内を刺激された衝撃が甘い快感に変わる。秘孔からは淫蜜が溢れ出し、挿入には十分なほど潤っていた。

それを確認すると、プラムは先端を秘孔へと密着させる。

『ほら行くわよ！挿れた瞬間に気絶するんじゃないわよ！』

『や、やめっ・・・！』

しかしプラムは腰をゆっくりと前に倒して、疑似ペニスを挿入させた。

『あっ・・・あっ・・・あああっ・・・あ、ああっ・・・！』

『あらあー、凄いい締め付け！それに入口が熱くてぐねぐねうねって・・・やだ、気持ちいいじゃない・・・こっちまでイッちゃいそう！』

舌なめずりをしながら、プラムが美貌を紅潮させて意外な快楽に悦ぶ声を上げる。

挿入されたデイルドは本物の男そのもので、脈動も質感も何一つ変わらない物だった。

プラムの疑似ペニスは巨大だったが、これまでそれを上回るあらゆる淫鬼の剛直を受け入れてきた炭治郎の身体なら、この程度は楽に挿る。しかし、先に胎内へ流し込まれた解毒剤が流動し、プラムが身体を動かす度に、炭治郎の身体も連動して動いて、胎内を甘く灼く。

『あああああっ！あっ！熱い、熱いいいいいっ！う、動かないで、くれ、お願い・・・ああああ！』

『馬鹿ねえ、動かないと意味がないじゃない？本当に締め付けがいいわね、このお尻。さすが淫鬼喰らいの巫子ね・・・』

プラムにしては珍しく他人を称賛しながら、腰をゆつくりと動かす。

緩慢な動きでずぶずぶと疑似ペニスを突き挿れる。

『ああ、あつ・・・あああつ・・・あ、あ、あああつ・・・！』

そして今度は引き抜くが、あくまでゆつくりと動作し、炭治郎の胎内の解毒剤が漏れない程度にまで腰を引く。

『うあつ！あつ！あああつ！ふああ・・・あつ、うつ・・・ああ・・・』

炭治郎の甘く裏返った声が会場内に響き渡る。それを聞いて観客たちは談笑を止め、スピーカーの音に耳を傾けて固唾を飲んで次の艶声を待っている。

『ほらどお？もっと速く動いてほしい？激しいのがいい？』

『んっ、あ、も、もう、中が、熱くて、抜いて、抜いてええ・・・』

『ほーら、抜くわよ？』

そう言うと、根元まで挿入していた疑似ペニスを先端まで一気に引き下げる。

『ああああああ・・・あつ・・・ああああ・・・！』

解毒剤が胎内で流動し、秘孔間際まで到達して周辺を灼く。

『やっぱりやーめた』

そして今度は一気に疑似ペニスを突き込んでくる。互いの接合部がぶつかってバチユッと音が鳴るほどの強烈な突き上げで胎内の解毒剤が激しく動き、炭治郎は甘い灼熱を胎内で感じさせられる。

『うあああつ！あつ・・・ああ、や、灼ける・・・ああ、あつ！ああつ！中が、熱いい！ああああつ・・・！』

胎内で解毒剤が効いているのか、痛みに切り替わるギリギリの感覚で胎内に灼熱を感じる。それをプラムは、陰湿に動いて炭治郎にじつくりと味わわせるのだ。

さらに上弦の鬼であるプラムの淫気を喰らって、快楽が天井知らずに上がってゆく。

『あ、ああ・・・あううつ・・・あ、あつあああ・・・あつ、あつ！ああああ・・・っ！』

炭治郎の身体は再び汗まみれになり、周囲に薫りを撒き散らしてしまう。この香りが伝説級の存在である淫鬼喰らいの巫子のものだと理解した観客たちは、深呼吸をしてそれを吸い込み、堪能する。

「ああ、本当に良い香りだ・・・」

「興奮してくるよ、この匂い・・・花の香りだね、何の花かな？」

「イランイランのような、沈丁花のような・・・蓮とも思えますね・・・」

淫鬼を興奮させる巫子の香りを吸って、一般人が欲情をきたさないはずがない。炭治郎を見る男たちの目がさらに欲に濡れ、端ではすでに自らを扱っている者までいる始末だ。

『あああ、もう・・・！熱いっ・・・！ふああああつ・・・！』

『あら、この程度でもう音を上げるつもり？まだまだ激しくいくわよ！』

プラムが炭治郎の腰を鷲掴むと、これまでのゆったりとした動きとは打って変わって激しい上下運動に切り替えた。硬いデイルドがガツガツと炭治郎の胎内を打ち、しかし痛みが一切無く、快感だけしか受け取らないなど、巫子の身体でしかありえないだろう。

『あっ！あっ！あっ！あっ！あぁあっ！あ、熱いっ！あぁあっ！あっ！あっ！あっ！あっ！』

『ほらほら、男のくせになんて声！みっともないけれど、ちよつと可愛いわね！』

女よりも艶っぽい声で喘ぐ炭治郎を見下ろしながら、プラムは余裕の表情で腰を動かし続けている。その額に汗が伝っているのは、本人でも気づいていなかった。

炭治郎の洞内は極上だった。ペニスバンドを使っているとは言え、その締め付けや吸引具合がどれほど素晴らしいものか、これまで数々の犠牲者たちを犯してきたプラムにはわかる。

（なんて気持ちいい身体！これまで犯した奴らなんてものの数にも入らないわ！）

炭治郎の身悶える姿に興奮しながら、夢中になって腰を振りたくる。

バチュバチュと互いのぶつかる音が速くなり、炭治郎が途中で何度も背中を仰け反らせて、儼く喘ぐ。

『あぁあっ……！あっ……あぁあっ……イク、あぁ、あぁあぁ……っ！』

炭治郎が激感の中で絶頂を何度も迎えるが、その瞬間が最高潮に気持ちよく、疑似男根が蕩けそうな激悦がプラムにも巻き起こり、つい自分も声を上げてしまう。

『あぁあー！いい、好いわぁ！さいっこー……！』

しかし、当然達悦はしないらしい。ペニバンの反対側にも感じる仕掛けがあるのか、相当の快楽を感じてはいるようだが、プラムにはまだ余力と余裕があった。

『んふふ、可愛いわねえ、不細工だけれど。もっともって味わわせてあげる!』

『うあああつ! あつ! あああああ……! ひあ、そ、そこ、だめっ……! あああああ……!』

さらに腰を速く動かされ、炭治郎の身体が大きく揺さぶられて胎内の解毒剤が暴れ狂う。身悶える炭治郎に覆い被さるプラムは、興奮が最高潮に達したのか、炭治郎の唇に噛みついて、舌でなぞって呼吸も味わった。

『はあ、なんだか私も気分が乗ってきちゃったわ。ねえ、気持ちいいでしょ? あんた』

快楽に顔を赤らめ、壮絶な美貌を迫らせて炭治郎の頬を舐める。その愛撫を続けながら腰の激しい動きは衰えさせず、また炭治郎を絶頂させた。

『はっ……ううっう……あああつ……!』

炭治郎の身体が痙攣し、挿入されたデイルドを最上級の具合で揉みしだく。

『ああー、これいいわ! すごくいい! あああああ……!』

胎内深くに穿ったまま、プラムは上半身を仰け反らせると、軽く痙攣して再び炭治郎の顔に覆いかぶさった。美しい額を伝って、顎先から興奮の汗が滴り落ちている。

『はあ、はあ、私がペニバン越しでイカされるなんて……やっぱり巫子ってそれなりなのね。褒めてあげるわ……』

荒い息でそう言って炭治郎の赤毛を撫で、耳を舐めしやぶる。興奮が止まらない様子のプラムだが、炭治郎は焦り始めていた。

(解毒剤、本当に効いてるのか? なんだか、頭がぼーっとして、どんどん快感が強くなってくる)

ただでさえ極限まで媚薬を投薬され、敏感の極致にある炭治郎だが、胎の灼ける快感が始まってから、その熱さで体中の性感が目覚めたようになり、より快楽を拾ってしまうようになっていた。

『んぐっ……！あっあああ——！』

十数度目かわからない絶頂が訪れ、その深さも徐々に増してゆく。胎内の絶頂に合わせて雛先からも白液が噴出し、得も言われぬ射精の快感も強くなり、一度の射精で五度に値するかのような快感が迸っていた。

溜められた精液が噴出する際の爽快感と雛先が蕩ける絶頂は、一瞬炭治郎の意識を消失させる。射精の度に霊力が削ぎ取られる感覚も相まって、それが快感となり、二重に炭治郎を快楽で苦しめていた。

『はぁ、はぁ、あっ……あああっ！あっ！も、もう……あああああっ……！』

『ふん、自分だけ気持ちよくなってるんじゃないわよ、ちゃんと私を愉しませなさい？』

しかしプラムは顔を紅潮させ、相変わらず激しい腰の動きで炭治郎を責め立てる。おおよそ女性が繰り返すとは思えない勢いで挿出を繰り返し、胎の快感もひと突きごとに絶頂をしているに等しい快感を、炭治郎は味わわされてしまう。

『は、はぁ、はぁ、なんだこれっ……！解毒剤……解毒、剤っ……！効いてないじゃない……かっ……！ああああ！』

堕ち切っていない証拠に炭治郎の赫い瞳はまだ理性の炎をともし、まともな言葉をしゃべれるほどには気力は保持していた。

これだけの責めを食らって、それでも人間らしい反応をする炭治郎に、プラムは一瞬虚を突かれたように驚いたが、すぐに厭らしい笑顔に変わって炭治郎の耳元で囁いた。

『あら、ごめんなさい、薬をまちがえちゃったわ？あんたに注入したのは、カプセルを100個と化した液体なのよ』

それを聞いて、炭治郎は体中の血がさあ……と引く感覚を覚えた。50個の溶けきっていないカプセルだけでも精神的にギリギリだというのに、それを上回る媚薬を注がれたとあっては、抵抗の術がない今では最悪の状態だ。

『どお？絶望した？これだけの薬を使われれば、いくら淫鬼喰らいの巫子でも廃人になっちゃうかもね！普通の人間なら、もうとつくに使いものにならないところだけど、さすがはまだまだ丈夫ね』

ギロチン台に乗せられたような気分を味わう炭治郎だったが、その感覚は甘く蕩け、解毒剤が催淫剤だと自覚した瞬間、身体中が燃え上がる様に耐えがたい激情が胎内で巻き起こった。

『あつ、あつ、あつ！ああつあつあああああ——！』

炭治郎の艶声が場内に炸裂し、その直後、炭治郎の身体の痙攣が止まらなくなった。カクカクと跳ね上がる腰をもう一度縛って椅子に張り付け、プラムが動きやすいように制限された。

『ふあつ！ああつ！あああ！あつあああああああ！』

雛先から白液とも潮とも判然としない液体が断続的に吹きあがり、吐き出す雛先は真っ赤に紅潮していた。いくら精がでても全く萎えることが無く、少年の性感器官は力強く屹立し続けている。

『んぐっ……！ひい、ああああ……っ！』

プラムの長い爪で右の胸の桜色を弾かれたが、それだけで絶頂しただけに留まらず、触れられていない左にまで共鳴し、快樂が伝わって上半身を痙攣させる。

『胸がそんなに感じるの？ だったらもっと可愛がつてあげる！』

『い、いや・・・っ！』

炭治郎のなけなしの反抗の言葉など気に掛けず、プラムは指先で硬く充血した桜色、紅色と言ってよいほど昂った桜色を連続して爪弾いた。細い指先で硬くなりきった桜色を上下に素早く擦り、それだけで炭治郎は胸をヒクヒクと痙攣させ、快感に背筋をのけぞらせる。

『あっ！ あっ！ あっ！ あっ！ ああああっ！ あっ！ ああっ・・・！ ん、ぐ、ああああっ！』

※中略※

もう被せられただけでイキそうだ。はあはあと喘ぐ炭治郎を愉しそうに眺めながら、男たちは雛先以外の性感帯を責めるのもやめない。

胸のカップは左右を逆にされて振動と連続舐めの感覚が立て続けに襲い、胸絶頂から容易に降りられないようにされてしまっていて、その快感が炭治郎の身体を火照らせ、さらに敏感にさせていた。

「このスイッチを押すと強弱が変わるんだよ？」

胸を責めている器具を操っている男が、手元のスイッチを何度も切り替える。すると、振動はさらに強くなり、緩やかになり、また強くなって、舐められる感覚は激しくなり、ゆったりにもなった。イキそうな激しさの直後に緩やかにされ、絶頂でできなかった落胆に暮れていると、直後には最大の快感が襲い、一気に絶頂しそうになってしまう。

『ふあっああああっ！』

（んんんっ……！また胸で果てる、と、止まらない……！ああ、胸で果てると、下半身も……！）

胸カップの出力を上げられ、ビリビリと電撃に似た快感が走り、炭治郎は絶頂を迎えてしまう。

『んんん———！』

上半身で絶頂し、その快感が下半身に伝播して雛先にまで伝わってくる。オナホに包まれているだけで気持ちが良い雛先が、さらに鋭敏になって仕掛けを施された中を強く味わってしまう。同時に、締め付けた胎でもエネマを強く感じてしまい、ビクビクと腰が跳ねた。身体のアちこちが痙攣し、快楽の乱舞に目の前に何度も星が飛ぶ。叫びたしたいほどあらゆるところが気持ちよくて、快楽に耐えるのも快感だという状態だ。

(い、一か所でイッたら他も感じてしまう、だめ、だめだ・・・！)

「体中気持ちいいねえ。可愛いなあ・・・」

「潤んだ赫い目が堪らないね・・・普段ならいかにも純朴そうな子なんだろうなあ。それが、今はこんなに淫らになってしまつて・・・」

『くっ・・・うう・・・』

男たちに賞賛されて、嬉しいわけがない。しかし、目を熱っぽく潤ませて、柔らかげな頬を上気させ、色づいた唇から甘い声を零す炭治郎の様子は、少年趣味のない者が見ても劣情を掻き立てずにはいられないほどの凄艶さだった。

「全部飲みこんじゃうよ・・・？」

『んあっ！あっ！はああああ・・・っ！』

先端も飲み込んで炭治郎の雛先全体がオナホに包まれる。中は先ほどのオナホよりもかなり締め付けが強く、快楽を堪えるために下半身に力を入れてしまい、後ろのエネマを強く咥え込んでしまう。

(だめだ、どこで感じてても、どこも・・・)

目を見開きながら大粒の涙を零す炭治郎の艶姿を見て、男たちは一層歓声を大きくする。

「さすが淫乱な巫子だ！ 後ろも調教済みだね！」

男たちの手が群がつて炭治郎の肌を撫でまわし、ただでさえ感じる肌をざわめかせてくる。

『うあああ、さ、触るなっ……。あ、ああっあああっ！』

雛先は未知の感覚である横回転に晒され、快楽の堪え方がわからない。腰がぐくぐくと痙攣し、一気に射精絶頂へと向かってしまう。そんな中、身体の他の部位を触られている場合ではないのだ。

『あつ！ひ、あ、あつああ、あああつあああああつ！』

雛先の先端にもシリコンの突起がついていて尿道を回転責めされ、射精の快感が通常よりもかなり強く感じてしまう。しかし、炭治郎が射精しても回転は終わらない。それどころか、男の一人がスイッチを操作し、振動を強めてきた。

『あああああああああつ！やめてええええええ！出る、出る、ああつあああああ！止まらない、止まらない……あああつあああああああ！』

二連続で気が遠くなるほどの激しい射精絶頂をし、炭治郎は同時にエネマでも絶頂した。両足の間、前後で爆裂な快感が弾け、一気に炭治郎の意識は闇に沈もうとする。

快樂の訓練を施された淫鬼喰らいの巫子だが、それでも耐えかねるほどの激悦だった。

「あれ、巫子ちゃん気絶しちゃったかな？」

「可愛い、イキ顔で気を失ったね……」

「これはキスしたいですな」

「私のもっとめちやくちやにしたい！」

「それでは、巫子ちゃんが気を失っている間に、これを使いましょうか・・・」

男たちの不穏な会話を知らず、炭治郎は束の間の休息を貪っていた。その安寧も、三分と経たずに打ち破られてしまう。

『っ！あ、ああっあああっ！』

いつの間にか胎内にあったエネマを引き抜かれ、また新しいエネマを挿入された。今度の物は先ほどのエネマよりも太く、存在感があるものだった。挿入されただけで前立腺をさらに強く押し上げられ、ぐう、と絶頂への快感を拾ってしまう。しかも、会陰部の食い込みがさらに激しくなっていて、こちらでも絶頂しそうだった。

『はあ、はあ、も、もう、止めろ・・・！』

快楽で虫の息となった炭治郎が訴えるが、男たちは笑みを深めるだけだった。

「もっともっと気持ちよくなるからね？」

「それまでがんばるんだ。巫子ちゃんなら、耐えられるよ・・・」

「これは相当刺激が強いですからねえ」

「チンポはどうします？」

「これがいいんじゃないか？」

男が取り出したのは、バレーボールのような形の淫具だった。ボールは硬い素材でできていて、中央に穴が開いており、その周辺だけ半透明で柔らかかった。

突然現れた不可思議な淫具に炭治郎はたじろぎ、身体を強張らせてしまう。すると、胎内のエネマを強く感じて腰をカクカクと動かしてしまった。

「ははは、もう挿入しただけで愉しんでくれるんだね。エッチな子だ」

『ち、違う、これはあ……』

「いいんだよ、愉しんでくれて。これはそういう物なんだ。そして、君は余すことなく感じられる最高の身体を持っている」

「ああ、本当にこんなに可愛くて、それなのに全て開発されているなんて、信じられないよ」

「こんなに愛らしいのにねえ……仕込んだ男たちがうらやましいですな」

『何を……うっ……!』

声を張り上げただけで胎内が擦れて感じてしまう。反抗の声すらふさがれて、炭治郎は悔しさに奥歯を噛み締めた。

「じゃあ、これを使ってあげようね。気持ち良くてチンポが蕩けちゃうよ？」

すると、炭治郎の目の前に透明の筒を突き付けてきた。その筒の中には先端に丸みを帯びた小さい粒がシリコンの紐につながって、いくつも連なっているものだった。まるでえのきを移植したようなその中に炭治郎は慄いたが、変形部分はそのだけではなく、その中間部には人間の舌を模した蛇腹が列をなし、入り口付近には弾力のありそうな疣がいくつも生えそろうていた。

これまでオナホの威力を散々味わわされた炭治郎は、その中身を見せられただけで、心とは裏腹に難先が反応してしまった。

「はははは、淫乱だねえ！いいねえ、この子可愛いねえ！」

『ち、違う、これは違う……！』

「いいんだよ、私たちはスケベな子は好きだ。さあ、どんどん気持ちよくなろうね？」

恥ずべき姿を觀られ、炭治郎は顔を耳まで真っ赤にして首を左右に激しく振る。あまり激しく動くと胎内に響くとわかっていても、羞恥のあまり、止められなかった。

男たちは炭治郎に見せつけたシリコンの筒をボール状のオナホに嵌め、炭治郎に近づいてくる。

『い、嫌だ！止めてくれ！嫌だ、嫌だ——！』

その直後、炭治郎の胎内で腰の奥が甘く痺れる強烈な快感が巻き起こった。

『………っ！』

あまりの衝撃に一瞬息を止めたほどだったが、その衝撃は一瞬ではなく、延々と続いている。

『うあっ！あっ！あああああっ……あ、あ、あ、あっあああああ！』

胎内がどんどん熱くなり、甘い痺れがどんどん強くなって、腰から下が蕩けそうになる。炭治郎が抗いも出来ずその甘悦を享受していると、ズン、とさらに重い快感が腰から尾てい骨を通って脳天を走り、身体が激しくヒクヒクと痙攣した。

『あああああっ！うあああああっ！』

体中の毛が逆立つほどの凄まじい快楽絶頂を迎えたのだとわかったが、それでも胎内で感じ続ける衝撃は止まらない。

「はは、早速イッてくれたようだね。どうかな？バイブ機能付きエネマは・・・」

挿入されているだけで拷問のように次々と絶頂が襲い来る淫具に、バイブ機能をつけるなど、なんという凶悪なことをしでかすのだろうか。

振動を止めないエネマは、炭治郎の最も敏感な性感帯、前立腺を内から刺激して、次々と快楽を打ち込んでくる。

ヴヴヴヴ、と振動音を立てながら前立腺を振動させ、秘孔の入り口まで振動していて、その振動が会陰にまで伝わってくる。会陰に食い込んだ部分はさらに強さを増し、指を強く押し付けられているように感じるほどだ。会陰からも前立腺を刺激され、内外両方で性感帯を容赦なく責められる。

『ひあっ！あああああっ！ああっ！あっ！だめ、だめ、抜い、抜いて！だめえええええ！』

絶頂感が再び炭治郎を襲い、腰が甘くジーンとどこまでも強く痺れてゆく。もう、意識がかすみそうなほどの激悦に、炭治郎は雛先から精液を迸らせた。

『うぐうううっ・・・うあ、あ、ああああっ・・・あっああああ、あああああああああ
あ・・・！』

二度立て続けに絶頂したが、エネマの振動は一切止まらず、ゴリゴリと性感帯を打震し続けている。
(だめだこれ、何も考えられなくなる、おかしくなる、だめ、止まらない、ま、また・・・果てる
っ・・・！イク・・・！)

「ふふふ、まだチンポは責めてないのに、後ろだけで射精したよこの子」

「トコロテンは気持ちよさそうでしたなあ」

「私はもつと、ドライでイクのを観たいですね」

「では、こうしてしましましょう」

男たちが薄気味悪い笑顔を浮かべながら、広げられた炭治郎の両足の間に入ると、射精したばかりの敏感な雛先を手に取り、その穢れない色をした根元へ輪をはめた。

『んんんんっ・・・!』

「よしよし、コックリングをあげようね・・・これで射精管理してあげよう。イキたかったら、いくらでもイッていいよ?」

『ひあ、そ、そんな・・・あああああああああつ!』

また胎内の絶頂が襲い、炭治郎が激しく背中を弓なりに反らせ、腰を強く突き出す。雛先から出そうとするが、根元に嵌められた布の輪が射精を阻止し、遂悦を許さない。

『あっ・・・ああ・・・あああつああああ・・・っ!』

胎内では絶え間なく絶頂快感が襲い、そのたびに意識を失いそうになるほどだが、雛先で渦巻く猛烈な達悦欲が邪魔をして、気を失うこともできない。

「こっちも新しい玩具にかえてあげようね」

胸をずっと責めていたカップを取り去られ、ようやく快楽刺激から解放されたが、また新たにカップをはめられる。今度のものは透明で、桜色がどのように馴染んでいるかよく見える仕様になっている。そ

して、先端が当たる部分にはシリコンの繊毛が不ぞろいに生えていて、取り付けられただけでゾクゾクと愉悦が走る。

「今度のは相当刺激が強いよ、覚悟してね」

「気持ちいいよ？ たっぷり楽しんでくれ」

※中略※

『んっ！んああああつ・・・！』

一瞬背中を仰け反らせ、はあはあと息をしながら男の腰の動きにされるがまま、炭治郎は揺さぶられる。突き上げるたびに引き抜かれるたびに絶頂が爆ぜて、身体が勝手に快楽を貪ってしまう。

しかし、身体を快楽漬けにされながらも、炭治郎は蜘蛛の糸のごとき細さで意識を繋ぎ止めていた。
(ま、まだ陰気は抽出し終わってないのか？一体、この人たちはどれぐらいの量を飲まされたんだ？ま、また、ううっ・・・終わらないのかっ・・・！)

自らの胎内に再び精液が流し込まれる感覚に、炭治郎の身体は歓喜する。もう幾度目か分からない中出し絶頂だが、快楽の強さは変わらず、陰気の濃さも変わらない。彼らの性格と陰気の性質に相当の親和性があるのか、未だに一人も救うことができていない。

数十を超える男たちに次々と凌辱され、身体中にも白濁した精液を吐き出され、今の炭治郎は精液のシヤワーを浴びたような、悲惨だが淫靡な姿になってしまっている。

髪や顔は当然、首、胸、下腹、股座、臀部、太腿、足裏・・・身体のどこでも、すでに精液がかかっていないところは無いだろう。

「うっ・・・うう・・・」

これだけの人数に犯されても、炭治郎は未だに意識を保っているらしく、瞑った目をヒクヒクと動かし、呻き声を上げている。脛が動いたびに、睫毛にまで絡んだ精液が垂れる。

「ふふん、どお？ 巫子。50人ぐらいには犯されたかしら？ で、陰気はちゃんと消化できた？」

「……っ！」

プラムが尋ねる間も、新たな男がやってきて、炭治郎を犯し始める。許容オーバーな媚薬を盛られ、大量の陰気で狂わされ、炭治郎の身体はこれ以上ないほどに敏感、鋭敏になり、快楽を拾いやすく、深く感じられるようになってしまっていた。

「おお……これだけ犯されても、まだまだ中は素晴らしい……吸い上げられるよ、たまらない……！」

太鼓腹の醜惡なシャツ姿の男が、だらしなく顔を歪めて腰を振る。その度に、炭治郎の身体に淫らな衝撃が打ち込まれ、足の指先をヒクヒクと痙攣させる。

「あつ……ぐつ……あああ、あつ……あああ……！」

喘ぎすぎてかすれた喉で炭治郎が凄艶な喘ぎ声を上げ、周囲はますます欲望を募らせてゆく。

「ほら、ちゃんと私の質問に答えなさい？ こいつらを正気に戻せたのかって聞いてんのよ！」

プラムは痛癢を起したように、いきなり炭治郎の赤毛を驚掴みにした。大きく頭を動かされ、精液が素肌の上を流動する。

「きゃっ！ やだ！ きったない！」

炭治郎の髪に付着した精液が掌に垂れ、プラムはあわてて手を離し、高級そうなベルベットの幕で手を遠慮なくふき取る。

太鼓腹の男は炭治郎の中で射精すると、みるみるうちに顔色が悪くなり、しかし、恍惚とした表情で引き抜くと、そのまま仰向けに倒れてしまった。

炭治郎を犯した男たちは精気を吸い上げられ、顔色を失っている。舞台の上に寝転がっている屍同然の男たちを見てプラムは薄く嗤った。

「あんたたち、ほんと情けないわね・・・一回巫子に出しただけでもうそんな有様？」

男たちは、うう、とか、ああ、と、情けない呻き声を上げてプラムの声に反応している。

「あと一本出したら、巫子にいくら出しても体力が削られない薬があるんだけど、どお？」

その提案には明らかに怪しさが含まれていたが、倒れている男たちには察することができない。

「クイン・・・ぜひ、私に薬を・・・」

「私も・・・」

男たちはかすれた声で次々と手を上げる。炭治郎を抱いて、その峻烈な快感が忘れられず、淫虐の欲望にとらわれた彼らは、何も考えられずプラムへ次々に大枚を叩いてゆく。

「ほら、じゃあ、これを飲みなさい？すぐに体力も性欲も回復するわよ」

舞台の端で待機していた黒服の警護人が、アタッシュケースをプラムに渡す。中に入っているのは、炭のように黒い液体のアンブルが詰まっていた。

それらの一本一本を男たちに手渡し、飲むように促すと、なんの疑問も持たずに彼らは中身を飲み干してゆく。

すると、力なく横たわっていた男たちが、次々と復活した。肌艶もよくなり、顔は興奮したように紅潮し、頼りない風情だった男たちに、屈強な男が持つ雰囲気まで漂っている。

「おお・・・これは凄い！一氣にギンギンだ！」

一人が両足の間をさすると、そこには下腹に付くほどに猛った肉棒が存在している。

「私もだ！凄い、もう犯したくてたまらないよ！」

「すごい効き目だ、十代の頃に戻ったかのように、興奮が止まらない！」

干からびていた男たちは瞬く間に精気を取り戻し、これまで以上にならないほど性欲が増しているようだった。まるで、内からの衝動ではち切れそうな雰囲気を持った男たちは、邪魔なスーツやワイシャツを脱いで、再び炭治郎に挑みかかる。

（な、なんだ、この人たちから強い陰気が感じられる！いくらなんでも、これを全て昇華することなんて、できない・・・！）

男たちの様子を見て驚愕しながら、炭治郎は絶望していた。

一人、二人程度なら炭治郎一人でも浄化できるが、十人近い欲望にギラついた男たちが相手となっては、さしもの炭治郎も自分の力の限界を超えているのを自覚してしまった。

「さあ、巫子ちゃん、続きだよ？」

「巫子ちゃんはここが良かったかな？」

男たちが群がり、炭治郎の放つ花の香りに興奮した生臭い男たちの臭気が混ざり合い、一瞬鼻を塞ぎたくなるような異質の香りが漂っている。

陰気の異臭を撒き散らす男たちは、薫る炭治郎の素肌へと手を伸ばし、再び無遠慮に撫で回し始めた。

「うっ……！あ、ああっ……！」

（なんだこれは？これまでの感覚じゃない、すごく感じる……！）

胸の桜色を指先で素早く擦られ、もう片方は抓まれて捏ね回され、炭治郎はすぐに絶頂を迎える。

「あっあああああっ！」

その途端、男たちの指から陰気が炭治郎に流れ、媚薬に等しいそれは、さらに炭治郎の性感を高めてゆく。

今の炭治郎はこれ以上快楽を感じるのも限界だというのに、追い打ちのように男たちの責めは再開された。

精液にまみれた耳に舌を這わされ、それだけで後頭部から背中を中心に掛けて、我慢しがたい甘い衝撃が走る。

「ああ、あっ……耳、やめ……！」

「何を言ってるんだ？感じるんだろう？」

耳元で囁かれ、ゾクリと感じた直後、耳朶を甘噛みされて電流が走った。

「ふあああああっ……！」

脳が蕩けるような感覚に呼応して、先ほど快楽を感じた場所全てが激しく痙攣する。

耳でイカされた炭治郎は、それだけで頭が真っ白になり、身体は快楽の淫熱がどんどん強くなってくる。

「やはり極上の肌だね・・・何を食べたならこんな風になるのかな？本当に素晴らしい・・・」
両手で炭治郎の身体中を撫で回し、相好を崩しながら炭治郎の肌の感触を楽しむ男がいる。この男からも強い陰気が感じられて、平時ではなんともない部分まで性感帯になったかのようにゾクゾクと快楽が駆け巡り、どんどん愉悅が蓄積してゆく。

精液のぬめりが手伝って、ローションのように炭治郎の素肌の上を滑り、男たちの手が通過しただけで背中が震えるほど感じてしまう。

それは、耳、首、胸元、胸、腕、わき腹、ヘソ、下腹、太腿、尻、足裏、全ての部分で感じ、身体で生じる淫虐の痙攣が止められない。

「うあっ！あっ！あっ！はあああっ、あ、あ、あ、あああっ！ひっ！だ、だ、め、あああっ！止めてくれ、止め・・・あああああっ！」

無惨の陰気とプラムの媚薬カプセルに、炭治郎と相性が悪い薬を使われ、平静でいられるわけがない。炭治郎に流されている快楽は、体中に這い回る全ての感覚が絶頂近い強烈なもので、巫子である炭治郎でなければ気が狂ってもおかしくないほどの蕩悦だった。

「んんんんんん———！」

雛先に触れられ、それだけで芯まで沁みる快感が訪れる。指でいたずらにビシビシと弾かれ、たったそれだけの刺激が衝撃となり、腰が無意識にガクガクと跳ね上がるほどの激悦が駆け抜ける。

「あぐっ！あぐっ！あぁっ！あっ！あぁあっ！あっ！あっ！あっ！あっ！」

雛先から吐き出される白液の量をみて、男たちが嗤う。

「全く、そんなにチンポを虐められるのが好きかね？」

「くくっ、たったこれだけの刺激で、もうこんなにビチャビチャに漏らして・・・悪い子だ・・・」

「ほらほら、指で弾かれて痛かったかな？優しく撫でてあげよう」

そう言うと、男は炭治郎の雛先にローションを大量に垂らした。

（んんっ！熱い、普通の、液体じゃない・・・！）

またもや感度が上がる媚薬成分を追加され、天井を知らないように炭治郎の身体は敏感に、さらに深い快感を得やすくなってゆく。

「ふぁっあぁあ・・・あぁ、あぁあぁあぁ・・・っ！」

液体を垂らされ、三秒と経たずに悶えずにはいられない激しい痒みと疼きが襲ってくる。これまでかつてない強力な媚薬だったらしく、炭治郎は耐えられず苦悶の艶声を上げた。

「おや、かなり敏感になったようですね」

「じゃあ、これはどうかな？」

快楽に対して最強に鋭敏になった雛先に、息を吹きかける。

「ひゃっ・・・！あ、あぁあぁあぁ——！」

痒みが刺激されると吹きかけられた息の風圧で感じてしまい、雛先から先走りの淫液が、股座をビチャビチャにするほど放出される。

「ううつ・・・うつ・・・はあ、はあ、はあ、はあ・・・っ！」

（こ、これは危険だ、快楽を・・・流せない、こんなに感じるなんて、ありえないっ・・・！）
当惑する炭治郎を眺めながら、ニヤニヤと厭らしい笑みを浮かべ、男たちが炭治郎を取り囲む。

「これは敏感なチンポですなあ・・・もっともっと可愛がつてあげないと、破裂しそうだ」

「ふふ、君も破裂は嫌だろう？出すのを手伝ってあげるよ」

「や、やめ、やめてくれ！ああ、だめ、ああ、ああっあああああああっ！」

炭治郎の拒絶の声も無視して、一人の男が雛先を握り込む。

「うああっ・・・」

それだけで呻き声だけしか出せない深い快感が訪れ、炭治郎はたちまち射精してしまった。

「なんだ、握られただけでもうイッたのかい？ほらほら、こうすればどうかな？」

炭治郎の反応が入った男は、その握った掌を上下に動かし始めた。男のごつごつした掌の表面が、容赦なく炭治郎の極敏になった雛先を扱きまくる。

痒みを解消される快感と、性的な快楽が同時に巻き起こり、正気を保てないほどの快楽が最も敏感な性感帯の一つを打つ。

「うああっあああああああああっ！あああああああっ！あああああああああっあああああ——

！」

上下に摩擦されるたびに雛先の先端から白液がぴゅ、ぴゅ、と吐き出され、激しい連続射精にこれまでに炭治郎は一番の快楽の叫びを上げる。

連続射精と絶頂が続き、極めていいときがないほどの、拷問に等しい快楽を次々と与えられ、炭治郎の身体は、過剰な悦楽でもう一段階、花開こうとしている。

「ひあああつ！擦るの駄目、いく、いく、いく、イク——っ！」

「あつ・・・ああ・・・」

ようやく動きを止められた時は、すでに炭治郎の赫い瞳に、日頃の快活な光は残っていなかった。

「ふふふ、では次は私の番ですな・・・」

「ん？なんだ、身体が・・・」

炭治郎と言う極上の華蜜を目の前にして、男たちがざわざわと騒ぎ始めた。

「うわあああ！なんだこれは！」

すると、一人の男が掲げた右腕が、タコのような吸盤のついた触手に変貌している。上等のスーツから覗くその姿は、この場にそぐわず滑稽ですらあった。

しかし、その驚愕の声はあちこちで上がり始める。

「わ、私の身体が・・・！」

「腕が、腕がアアアアア！」

「舌が、こんなに長く・・・」

「うああ、身体が溶ける！」

男たちの身体は徐々に変貌を成し、床にかつて着用していたスーツをばらまいて、異形へと化していた。

「クイーン……ご、これは……なんで……何を……じ……だ……！」

身体がイソギンチャクのように触手まみれになった男が、どの口とも知れない器官から呻き声を上げる。

「あらあ、さっきの薬が効きすぎたようね？ やっぱり普通の人間相手じゃ耐えきれないかしら」

「な、なんだと……」

「貴様、それを、知って……」

恨み言を次々と言う異形と化した男たちを見下し、プラムは言い放つ。

「何言ってるの、あんたたちはもうすでに人間の姿よりもそっちの方がお似合いよ。自分の欲望をこれから思う存分吐き出せるようになって、むしろラッキーと思ってもらわないとね」

プラムは一番近くにいた男の触手をハイヒールで踏みつけ、蹴り退ける。

「お……お……おお……」

そこかしこから人間のものとも異妖ともとれる呻き声が立ち上がり、やがて静かになった時には、炭治郎の身体へ一斉に様々な色の触手が巻き付いてきた。

「ああっ！ そ、そんな、なんてことを……っ！」

じゆるじゆると身体中を這い回る触手の感触に熱い息を吐きながら、炭治郎は悲嘆の声を上げる。

「巫子ちゃん、巫子ちゃん……」

「ああ、可愛いなあ・・・この肌の触り心地、最高だよ・・・」

「もつといやらしいところがみたいなあ・・・」

人外になってしまった男たちは、それでもまだ隠していた欲望がさらに肥大し、炭治郎へその陰湿な性欲を向け始める。

「んんっ！あつ、あつ！だ、だめ、正気に・・・あつああああつ！」

身体中に様々な形の触手がまとわりつき、一斉に炭治郎を責めにかかった。

胸の桜色にヒルのような触手が取りつくと、そのまま強く吸い上げる。

「はああああつ！」

中に繊毛があり、吸い上げながら表面を勢いよく擦られ、炭治郎はたちまち絶頂近くまで追い上げられた。

もう一方の桜色には糸のような触手が絡み、その細い触手を桜色に巻き付けると、じゅるじゅると締めあげながら擦りまくってくる。触手には微妙に小さなコブがあり、それが擦れるたびに刺激になって、こちらも炭治郎の性感を激しく追い上げた。

「ああ、あつ！ああつ！あつ！あつ！だめ、だめっ・・・！ふあああああつ！そこ、だめっ・・・！」

毛足の長い繊毛を連ねた長い触手があるが、その表面はぬるぬるだ。その触手が、炭治郎の両足の間に向くと、まず根元を秘孔にあてがい、そのまま雛先に向かってズルズルとゆっくり引き上げ、じゅくと両足の間の性感帯群を責めてゆく。

「ふあああああああつ！ああああああああつ！あつ！ああああああああ！」

風が吹くだけで感じる雛先にぬるぬるの纖毛が通過し、声を出さずにはいられない快感が甘く走る。纖毛の一本一本を感じられるほど雛先は鋭敏になり、触手が裏筋やくびれ、先端だけにとどまらず、包み込むような長さで全体を覆う。

動かされず、密着されているだけでも絶頂しそうなのに、それはさらにゆっくりと動く。

「あつ・・・あああ、あああつあああああつ！」

じゆるん、と秘孔から雛先の先端の鈴口まで触手を通った瞬間、炭治郎は勢いよく射精してしまった。しかし、纖毛触手の責めは終わらない。今度は後ろから前にではなく、前から後ろへとゆっくりと動き始める。

「うあつ、ああつ、あ、あ、あ、あ、あああつ！だ、だめ、んんんっ！」

雛先と会陰、秘孔の入り口全てを一斉にぬるぬると摩擦され、涎が出るほどの悦楽が炭治郎の身体を走破する。ビクビクと反応する身体は、男たちの触手に押さえつけられて、快樂の逃げ場すら与えられないでいる。

「そんなにオマタを擦られるのが気持ちいいのかな？巫子ちゃん」

突然屈辱的な言葉を投げかけられ、炭治郎は一瞬反発心と羞恥心が湧き上がる。

「そ、そんな、こんなっ・・・！わけ、ないっ・・・！」

今もじゆるじゆると両足の間を通る触手の快樂を感じながら、気丈に炭治郎が言い放つ。

「そうかな？こうなっても、まだそんなことが言えるかな？」

恥ずかしい言葉を投げかけられるが、ほぼ絶頂状態だった最中から解放された炭治郎には、何かを答えられる余裕はない。

「ふふっ、下準備はもうこれで十分だろう、さあ、もっと愉しませてもらおうか！」

すると周囲の触手が一斉に動き、左右に開かされ、まだ痙攣の治まっていないう炭治郎の両足の間へ触手が何本も向かってきた。

「あああつ！あつ！うあああああつ！」

大小も形も異なる触手が一斉に秘孔に集まり、すでに淫蜜でべとべとに濡れた入口へと挿ってゆく。

身体中が淫気に満たされ、はち切れる寸前の炭治郎の胎へ一斉に快楽の刺激が訪れ、挿入されただけで炭治郎は軽く達してしまった。

「うあ、ああ、あああああつ！」

身体中に巻き付いて炭治郎を拘束している触手のせいで、思う存分暴れまわることができない。快感のはけ口が塞がれ、ただ感じるしか許されず、炭治郎は下半身ばかりでなく、全身を駆け抜ける快楽に肌を震わせた。

「これはなんとも、温かくて締め付けの良い名器ですな」

「ほらほら、ここが気持ちいいのかな？このあたりが前立腺かな？」

ブラシの繊毛を揃えた一本の触手が前立腺の裏を激しく上下に摩擦し、一気に絶頂へと駆け上らされる。

「んんっ、んっ！んあああああああ———！」

※中略※

「んっ、うう、くっ・・・はぁ、はぁ・・・」

触れられるたび、身体にゾクゾクと痺れるような感覚が広がり、身体が勝手に痙攣してしまふ。

「血鎌に含まれてる淫毒は強烈だぞオ・・・ステージの上で、お前が使われてた媚薬より濃いからなア・・・」

一粒で十日は自慰がとまらなくなる媚薬より濃度が高いものと聞かされ、炭治郎は意識してしまい、身体が淫熱に炙られるのを感じてしまった。

「うっ・・・くっぁぁ・・・」

体中の性感帯がざわめき、強すぎる欲情で身体が震え、呼吸が早くなる。鬼に触れられると、そこがどうしようもなく気持ち良くて、ついため息が漏れそうになってしまう。

「んん、いや、だ、ぁぁぁぁ・・・っ！」

炭治郎の首や胸、腹筋や脇を撫でまわしながら、性感帯はわざと避けて鬼が嗤う。

「どうだ？相当効いてるようじゃねえか。顔がもう真っ赤っかだぜ？ありや、目がさらに赫くなっただなぁ・・・髪も・・・綺麗だなア・・・」

炭治郎が本気で感じ始めると変化する目と髪に見蕩れながら、痩せた鬼は胸の桜色を指で爪弾いた。

「あああああっ！」

急激に甘い衝撃を感じ、炭治郎の喉から艶声が零れる。我慢などできるはずもない問答無用の発情状態で、身体の淫熱の対処を心得ている炭治郎でも、どうすることもできなくなっていた。

（こ、こんなに感じるなんて、だめだ、意識がかすむ・・・）

「しかし、良いように成長したなア・・・このすべすべの肌、前よりも手触りがいいぜ・・・さぞ、大切に育てられたんだろうなア・・・」

炭治郎の苦悩と厳格な修行にまみれた二年を知らない鬼は、羨ましそうに言い放ち、その肌に舌を這わせる。

「んっ・・・んん・・・んんっ・・・！」

首から胸の間を舐められ、熱い舌に肌がビクビクと反応してしまう。歯を食いしばって快楽に耐えるが、完全には声を抑えられない。

「そういえば、お仕置きがまだだったなア・・・ちよつとキツイかもしれねえが、しょうがねえもんなア・・・」

鬼はいやらしく笑うと、炭治郎の両足の間に手を添えた。掌は、すでに先端から淫液を流している雛先を捕らえる。

「んぐううっ・・・ううっ・・・ふあ、あ、あ、あ・・・！」

触れられただけで内部まで浸食するほどの熱が昂り、指先でぬるぬると擦られただけですぐに白液を放ってしまった。

「ああああああつ！」

絶頂の快感に我慢できず、炭治郎が声を上げて背中を弓なりに反らせる。絶頂の快楽は深く強く、一度達しただけで意識が妄とかすむほどだった。

「はあ、はあ、はあ……」

「くくつ、巫子ちゃん、早速イッちまったか？早すぎるぜ？そんなんじや、女を愉しませてやれねえなあ……ああ、巫子ちゃんは男専用かア……可哀そうになア……まあ、気持ちいいんだろう？だったらいいじゃねえか、なあ？」

「うつ、くつ……うつ……」

屈辱的なことを好き放題に言われ、反抗したいが、身体の欲情が激しく、艶めいた喘ぎを抑えるのが精いっぱいだった。

「ここも綺麗な色してるなア……敏感なんだな、ほんと、めちやくちや敏感だよなア。なあ、巫子ちゃん？」

瘦せた鬼は、再び炭治郎の雛先を握り込み、上下に擦って刺激を与えてくる。

「んんんっ！んあああつ！はあ、あ、あああ、あつ！ああああ！あつ！あああああ！」

感じすぎて我慢できず、炭治郎は色っぽい声色をあげてしまう。しかし、鬼は炭治郎が達悦する直前で手の動きを止めてしまった。

「くう……うつ……はあ、はあ……」

発情しすぎて体中を震わせている炭治郎を見下ろし、瘦せた鬼は陰湿に嗤う。

「じゃあ、お仕置きだ・・・精々泣きわめくんだな！」

鬼が手をかざすと、血鎌が再び現れ、空中で攻撃の形になってゆく。そして、炭治郎の力を持っている雛先に突き刺さった。

「ああああああああ！」

痛みはないが、強力な淫毒を含んだ血鎌で攻撃され、その衝撃と熱さに炭治郎が大きな声で叫ぶ。

「くあつ！あつ！ああつ！あつ！あつ！あああつ！うあああつ！あつ・・・あつああつ！」

血鎌は何度も雛先を通り抜け、残酷にも淫毒を容赦なく連続で打ち込んでゆく。

「あははははつ！どうだ、苦しいか？キツいか？欲情しすぎて、もうこっちも真っ赤っかだ！はははははア！」

ようやく血鎌の襲来が止まったが、炭治郎の雛先は赤く充血し切り、先端からはすでにとろとろと淫液をこぼし続けている。早く刺激が欲しくて健気に震え、ヒクヒクと脈動していた。

「はっ・・・くうう・・・っ、こんな・・・ああ・・・っあつあ、ああ・・・」

狂おしいほどの強烈な性感帯の火照りに、炭治郎は、はひはひ、と絶え絶えな息を吐き、身体を震わせている。

「はああ、目がうるうるして可愛いなあ、今にも泣きだしそうじゃねえか！たまらねえなあ・・・！でもまだ犯してやらねえよ・・・残念だったなあ、俺の精液があつたら、元気になれたのになア！」

そう言って炭治郎の目の前に顔を近づけると、そのまま舌を伸ばして炭治郎の唇を舐めしやぶり始めた。

「んんんっ！んん！は、んぶっ……！んぐっ、んんっ！んっ！んん——！」

舌を絡められて強く吸い上げられ、それだけで口で絶頂してしまう。頭の後ろが甘く痺れ、その波動が身体全体に伝わって、身体が勝手に痙攣し、刺激を求めて暴走してしまう。

「ふは、はあ、はあ、あああああっ……！」

少し身体を触られたただけだというのに、炭治郎はもう汗まみれになっていた。体液からは濃い花の香りが漂い、瘦せた鬼の理性をさらにとりはらってゆく。

「いい匂いがあるなア……昔より濃くなったなア。巫子ちゃん、ほんとうに育ったなア……このまま成長したら、もっともっと綺麗になるんだろうなア……」

胸の両方の桜色を指先でつまんで、小刻みに擦り続けると、一分と経たず炭治郎は胸でも絶頂した。

「んぐううううううっ！」

すぐに達悦するだけでなく、達した後の余韻も相当強い。まだ絶頂が尾を引いている間も刺激を続けられ、再び一分と経たずにすぐ絶頂してしまう。そして、続けられる愛撫。もう、絶頂が止まらない。

「うあああっ！ああっ！んぐうううううっ！はあ、ああ、あああああああっ！い、イッて、待って……！んんっ！あああああああっ！」

「なんだって？どうした？巫子ちゃん、どうして欲しい？こうして欲しいか？」

強く抓まれながら引つ張られ、強烈な絶頂感に炭治郎は目の前で火花が散るほどの激悦を感じた。

「ひあっ……ああ……は、はあ、ああ……あっ……ああ……」

終わらない絶頂を十数回繰り返され、炭治郎は瞳から涙を流して激しく喘いでいる。反抗的だった眉はハの字に垂れ、身体からは汗と震えが止まらず、触れられていない他の性感帯が狂おしいほどに熱を高めてしまっている。

絶頂しているのに身体が激しく疼き続ける快樂拷問にかけられ、炭治郎は欲情の限界まで昂らされていた。

※中略※

胸を愛撫する義勇の指の動きが早くなり、触れるか触れないかのじれったい物ではなく、的確に性感を高める意志を持って動いてきた。

不意に爪を立てられてそのままカリカリとひつかかれ、稲妻のような強快感が走り、炭治郎の身体が反射的に痙攣する。

「ああああっ！あつ！あつ！だめ、それ、だめ……！」

散々炭治郎をビクビクと感じさせ、再び緩やかな愛撫に戻るが、先ほどの爪愛撫で桜色がとんでもなく敏感になってしまっている。指先でこね回されると、髪の毛の先まで感じるほどむずがゆくすぐつたい感触が突き抜ける。

「ん、ん、ん、ん……」

それに呼応するように炭治郎の身体が鳴き始め、我慢できない快感の高ぶりが上半身に集約する。

「あつ、あああつ……義勇さん、やめて、果てる、果てる……っ！」

自分を愛撫する義勇の腕を掴んで止めさせようとするが、快楽で力の入っていない手では当然防ぐことはできず、高速で上下に摩擦された直後、キュウと両方を摘ままれ、そのまま炭治郎は達悦を迎えた。

「あああああつ……！」

炭治郎のしなやかな背中が反り返り、湯がバシバシと跳ねる。のけ反った瞬間、義勇と同じ目線の高さになり、その表情を目の当たりにしたが、やはり無表情だった。目が合ったのは一瞬だ。直後には、義勇は炭治郎の後頭部の生え際から首の根元まで唇を落とし、さらに絶頂の快感を高めてきた。

「ひゃ、あ、ああああ……つと、止まらな……！」

胸の絶頂は、一度迎えると刺激され続けば延々と続く。炭治郎が愛らしい鳴き声を続けながら身体を硬直させ、絶頂を何度も迎えさせられ、風呂の湯は大きく波打って湯舟の外に零れるほどになった。

「ああ、あ、あつああああつ！」

最後にぎゅう、と突起を摘ままれ、一際高い絶頂を感じて脱力すると、義勇はようやく炭治郎を悦楽から解放した。

「は……はああ……」

力の抜けきった声を出して炭治郎は背後の義勇の身体にもたれかかり、絶頂直後の吐息を荒く吐く。後頭部を倒して義勇の肩に預けると、絶頂に蕩けた目から義勇の顔が見えた。

（笑ってる……？）

ぼんやりとした視界の向こうでは、義勇がかすかに口元に微笑を湛えているように見えた。

「良い……お前のその顔は本当に可愛い。そこまで感じ入ってくれると、俺も嬉しくなる」

また平素の義勇らしくない科白に、炭治郎は心中照れまくったが、絶頂の余韻が強くて表情に出せなかった。

「炭治郎……」

優しく咬きながら、義勇が炭治郎の頬や額、首元や口に唇を落としてくる。啄むような優しいキスで、炭治郎はその気持ちよさに意識が落ちそうになった。

（義勇さん、今日、どうしたのかな）

普段と違う義勇の様子に戸惑いながらも、その愛撫に炭治郎は流されてゆく。

「感じやすいな、お前は」

「いえ、まあ、その・・・」

今日の義勇の言葉は返事に困る物ばかりだ。照れて良いのか怒っていいのか、炭治郎は少々いたたまれない。その直後、また砂糖が焦げるような匂いがした。

「この身体を・・・」

「え？」

炭治郎が言葉に反応すると、義勇の指がまた桜色をキュ、と摘まみ、炭治郎の身体がビクンと跳ねる。

「ひゃっ！」

まだ完全に絶頂から降りきっていない性感帯を強く刺激され、腰骨までぞくんと甘美が走る。

「あっ・・・ちよっと・・・！」

義勇の両手が上半身を離れ、するすると下腹へ向かい、太腿を撫で上げて、内腿へと流れてゆく。

すでにこれまでの愛撫で兆している雛先が、触れられることを期待して疼いていた。しかし、義勇はすぐに性感帯には触れてこない。太ももや鼠径部を焦らすように撫でまわし、時折上半身にもどって桜色を弄りながら、緩やかな愛撫を続けてくる。

炭治郎も身体の感度がますますあがり、背中に密着している義勇の体温からも性的な刺激を感じるようになって、無意識に肌を押し付けていた。

「あのっ・・・義勇さん・・・」

自分の身体を撫でまわす逞しい両腕を軽く掴んで、炭治郎は蕩けた目で振り返り、義勇の表情を伺った。

口元は見えなかったが、義勇の目は相変わらず表情がなくて、何を考えているのかわからない。しかし、ずっと幽かな甘く焦げた匂いが炭治郎の鼻をくすぐっている。

（なんだ？この匂い・・・たまに嗅ぐけれど、よくわからないんだよな）

今の義勇に限ったことではなく、仕事中でも客から、錆兎から、宇髄から、これまで調伏してきた淫鬼からも、時折漂ってくる。

強い香りではないうえ、無視しても相手との関係が悪化したことはないから、炭治郎は頓着していなかったが、今はこの香りが重要な気がしてならない。

義勇の手が、なんだかいつもあり熱い。薫ってくるこの不明な香りと同時に、義勇がひどく性的に興奮している匂いも漂ってくる。久々のセックスということで昂っているのかもしれないが、義勇は性の教義に習う外法の術者だ。定期的に性欲をコントロールして人を抱くのも修行である。

恐らく炭治郎が風俗嬢として勤務している間も、炭治郎と一緒に住み込み始めてからも、義勇は外で名も知れない女性たちと逢瀬をしていたはずだ。

義勇ほど美形でスタイルも良く、声まで良い、などという出来過ぎた男が高級車を乗り回せば、女の子は嫌でも寄ってくる。より取り見取りの状況で、教義の相手にも不足はなかっただろう。

もしかしたら、昨日もどこかで女性を抱いていたのかもしれない。

性欲は吐き出しているはずの義勇が、まるで数日間欲のお預けをされた獣のように、今は性急に炭治郎を求めてくるのに、理解できない思いがよぎった。

(えっ・・・)

義勇の身体にもたれかかると、腰に硬い物が当たると。それは間違いなく男の兆した物だったが、炭治郎には意外だった。これまで義勇とこの格好で一緒に風呂に入ったことは何度もあるが、こんなにわかりやすいほど欲望を現したことはなかったからだ。

触れ合いが執拗になり、セックスになることはよくあるが、最初から昂っているのは珍しい。

(義勇さん、なんか今日は違うなあ)

炭治郎がそう訝しがっている間に、肌を撫でる義勇の手は進み、両足の雛先にたどり着いた。

「ん・・・」

胸の絶頂ですでに反応していたそこを片手で掴まれ、根元から先端までをゆっくりと擦られる。その途端、腰から尋常ではない快感がせりあがり、炭治郎は困惑し、身体を縦に揺らして驚愕した。

「うあっ！ちよ、ちよっと・・・！」

いくらなんでも快感が強すぎる。炭治郎の身体は敏感に仕上げられているが、少し触れられただけでここまで強力な快感が走るのは想定外だった。

戸惑う炭治郎を片手で抱きしめて抑え込み、雛先を握った義勇の手は、緩慢な動作で上下に擦る運動を続けてくる。

「いつ・・・ああ、あ、っ・・・」

「どうだ？良いか？」

ほとんど耳にキスされながらの近くで囁かれ、耳からも項にかけてゾクゾクが走る。

「ひやつ！か、感じ、すぎます・・・っ・・・」

「それは良かった」

耳まで真っ赤になった炭治郎の耳朶を舐めながら、義勇がまた呟く。いう声も、いつもより低くて色香が尋常じゃない。初めての相手でもないのに、炭治郎は胸の高鳴りを感じていた。

（義勇さんには、何回も抱かれてるのに・・・）

改めて義勇の顔面を伺うと、本当に整った顔立ちをしていると思う。

切れ長の目は涼やかで、中の瞳は青みがかっていて神秘的とも言える。まつ毛も長くて中性的で、筆でなぞったように出来過ぎた鼻筋に、引き締められた口元、顔の輪郭は細面だが、女性らしさではなく、男性の色香が漂う絶妙なライン。そこに無造作ながらも、それすら計算されているかのような黒々とした長髪に、彫刻のモデルのように逞しい身体。

背中にその筋肉の隆起を感じられ、炭治郎はなんだか胸がドキドキしてしまうのを止められなかった。

「あの、なにか、使いましたか？」

「何を」

「あの、術とか・・・」

しかし義勇は炭治郎の問いには答えず、雛先をするすると擦り続ける。

続きは製品版でお楽しみください。